



TITLE:

知玄と圓仁：「入唐求法巡禮行記」 研究の一節

AUTHOR(S):

小野, 勝年

CITATION:

小野, 勝年. 知玄と圓仁：「入唐求法巡禮行記」研究の一節. 東洋史研究
1956, 15(2): 212-234

ISSUE DATE:

1956-10-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145883>

RIGHT:

知玄と圓仁

——「入唐求法巡禮行記」研究の一節——

小 野 勝 年

一

悟達國師知玄の傳記は「宋高僧傳」卷六に唐彭州丹景山知玄傳としておさめられている。それによると俗姓を陳氏といふ、四川の眉州洪雅縣の出身であつて、曾祖父を圖南、祖父を憲、父を邈といい、彼が生れたのは憲宗の元和四年（八〇九）頃のことと思われる。幼にして秀才のはまれ高く、五才のときすでに詠花と題する詩を作つたという。十一才のとき法泰法師にしたがつて剃髮し、四安寺で勉強した。十三才頃、人々は彼を目して老成の風があるといつて評判した。これを聞いた劍南西川節度使の杜元穎⁽¹⁾は彼をまねき成都の大慈寺の普賢閣で講説せしめたところ、益々その名

聲を高め、陳菩薩と俗稱されるにいたつた。その後、淨衆寺の辨貞律師のもとで具足戒を受け、さらに固律師から律や俱舍を學んだ。かくて師と共に蜀を去り三峽を下り、荆襄地方をへて首都長安に入つた。こゝに師というのは誰を指しているか明確でないが、あるいは法泰法師のことであつたかも知れぬ。さらに同書によると、

抵于資聖寺。此寺四海三學之人會要之地。玄敷演經論、僧俗仰觀。戶外之屨、日其多矣。文宗皇帝聞之宣入顧問、甚愜皇情。

とあり、長安においては資聖寺に止住することになつたことが窺われる。いうまでもなく、この寺院は東街の西南の崇仁坊の東南隅に位置した名利で、もと長孫無忌の宅であ

ったが、龍朔元年(六六一)に尼寺となり、咸亨四年(六七三)僧寺に改められ、その後長安三年(七〇三)に火災などを蒙ったが、幸にも復興し、堂々たる伽藍をはじめ淨土院・圓塔院・觀音院⁽¹⁾などがあり、處々に名家の壁畫などが描かれ、人々の訪うものも多かった。⁽²⁾この寺院で知玄は經論を講説し、多くの僧俗の敬仰をえ、外部から集り来るものも日に盛んであったので、遂に文宗がその名を傳え聞いて、内殿に召して顧問せられるに至った。資聖寺ではさらに唯識の研究をし、その他外典についても學ぶところがあった。

武宗が即位してから、その德陽日すなわち誕生日の祝賀に當り、麟德殿に召され、道士と三教の得失を論争した。

この時、知玄は帝王たるものゝ理道教化の根本を述べるとともに道教神仙の術に對して痛烈な批判をあげたので、佛教をうとんじ道教に歸依せんとする武宗がこれに對して不快を覺えたことは當然である。左護軍中尉仇士良や内樞密使楊欽義らのとりなしによつて、詩五篇を作つてたてまつり、辛じてその難をまぬがれたという。詩篇の末章に

生天本自生天業。未_レ必求_レ仙便得_レ仙。鶴背傾危龍背滑。

君王且住一千年。

とあり、天子は生れながらのものであるから、仙を求めずとも仙たるをうるのである、道教によらずとも君王として一千年の長命を保ちうると、僅かに妥協的な意味をもらして、武宗の感情をほぐさんとしたことが窺われる。この事件が武宗即位の何年目の誕生日のことであるかについては多少考證を要するものがあるので、後述したい。

この事件のため、知玄は不遇の境地に追込まれたことも想像に困難でなく、かくてひそかに長安を去り、巴峴の故山に歸り、さらに湖湘の間に到る結果となつた。そこでは廉問使楊漢公⁽³⁾の知遇をえ、なお桂州開元寺にも止宿したと傳えている。

三武一宗といわれる排佛の狂嵐は武宗の崩御と共に鎮靜し、宣宗の登極によつて復興の氣運に向うことゝなつた。

このとき護軍中尉であり、功德使にも任じていたと思われる楊欽義は早速獻言してその復興に努めるとともに、知玄をたすねてその上京をうながさしめたので、彼はそれに應じて長安に來たり、今度は寶應寺に止住することゝなつた。寶應寺は左街の道政坊にあり、大歷四年(七六九)王揖が邸宅を寄進した寺院である。

宣宗もまた壽昌節すなわち彼の誕生日にあたり、知玄を召し、法會の講讀を行わしめた。そして紫袈裟を賜わり、三教談論の首座に任命した。さらに帝は藩邸をもって法乾寺を建立したが、この寺内の玉虛亭を知玄の居所とするなどすこぶる優遇した。その後、大中三年(八四九)の降誕節には李貽孫・楊漢公らと共に儒佛道三教の鼎論を行い、大いに帝意に稱い、これに乗じて天下の廢寺を重建せしむることについて奏上したりした。この頃宰相の裴休とも深き交友が行われた様子である。しかし大中八年には長安を去って故山に歸り、爾來もっぱら地方教化に努めた。廣明二年(八八二)僖宗が蜀に蒙塵した際にはその行在に詣で、親しく帝から悟達國師の號を賜った。翌年六月、九隴山において示寂。ときに享年七十三であったという。

これより先、成都の興善寺に留錫中、柳宗元の幕僚であった李義山の眼疾を治療してやったことが機縁となつて、その深い歸依をえたことも一の語り草である。

以上「宋高僧傳」に記載するところに隨ひ知玄の略歴を記述してみた。同書の著者贊寧は知玄傳を作成するにあたって恐らく主として僧徹の撰述した知玄傳を参考としたも

のではあるまいかと思われる。後者は今日傳存していないので比較するに由ないが、撰者の僧徹は後に長安兩街僧錄ともなり佛教復興事業に參じ、また知玄の唯一の高弟ともいうべき人であるから、その記述は相當信頼出来るものであつたと思われる⁽⁴⁾。しかし何れにせよ今日殘存している中國側の資料からは直接に圓仁(慈覺大師)と知玄との關係を物語るものはないのである。これに對して、圓仁自らの記すところによると、兩者の間に密接な交渉のあることが知られる。従來、この關係について特に述べたものもないようであるが、日唐文化交渉の一挿話としても興味深い事實であるから、以下に敢て筆を執り、合せて大方の示教をも仰ぐことゝした。

註

①杜元穎は杜如晦の裔孫である。貞元末年進士に及第し、累進して長慶元年には宰相となつた。劍南西川節度使として蜀に鎮じたのは同三年からで、珍異玩好を求めて貢奉し、天子の恩寵をえたが、太和三年南詔蠻の侵略にあつて失脚し、循州司馬に貶せられ、同地で死没した。その傳は「舊唐書」卷一六三「新唐書」卷九六に掲載されている。

②「大唐新求聖教目錄」に長安資聖寺寶應觀音院壁上山岳天台等眞影讚一卷とあり、資聖寺内に寶應觀音院という一院があつたこ

とも知られる。

③宋敏求の「長安志」や徐松の「兩京城坊考」卷三には長安城中には資聖寺が二ヶ處あることになっている。一は東市の西坡に在り、他は崇仁坊の東南隅である。しかし東市から見れば崇仁坊は横街を隔て、西北に當り、極めて近かった。しからは或は同一寺院を二寺と誤ったのがそのまゝ傳えられたのではあるまいか。しばらく疑を存しておく。

④楊漢公、楊虞卿の弟。太和八年進士に及第。「新唐書」卷一七五によれば舒・湖・毫・蘇の諸州刺史に歴任したのち桂管浙東觀察使に擢んでられ、後に荆南節度使にも任ぜられた。觀察使の職は地方の廉問がその任務の一つであったから、廉問使というのはその俗稱であろう。

⑤僧徹の傳記は「宋高僧傳」卷六唐京兆大安國寺僧徹傳に見え、知玄を慕い、これに仕え、彼が新義別章を作れば皆囑して敷衍せしめたという。また知玄に次いで天子の誕辰の講筵に召され、會昌廢佛の後、福壽寺（西明寺）の尼僧の大藏經の書寫や檀像の發願事業を檢校した。さらに「杜陽雜編」卷下に見える咸通十二年安國寺に下賜された沈檀の講座ではじめて講論した僧徹も同一人であろう。彼が知玄の傳を撰したのは中和二年である。

二

知玄が資聖寺に留錫している間、彼の名聲をしたってその下に參する者の多かつたことは前項でも觸れたが、その

際敢てとり殘しておいた一節に左のごとき記事があるのである。すなわち、

有楊茂孝者。鴻儒也。就玄尋究內典。直欲效謝康樂、注涅槃經。多執卷質疑。隨爲部部判。致書云、方今海內龍象、非師而誰。次楊刑部汝士・高左丞元裕・長安楊魯士、咸造門。擬結蓮社。

とあるものである。これによると在俗の名士、楊茂孝・楊汝士・高元裕⁽¹⁾・楊魯士らが相連らなってその門に詣り、知玄を中心とした有様は恰も東晉時代に慧遠が廬山にあるや彼を中心として集まった白蓮社のごとくであったというのである。

けだし慧遠によつてはじめられた白蓮社はその示寂によつて振わなくなつてしまつたともいわれているが、その感化は實のところ遠く後世に及んだのであつて、唐代には長安の善導、衡山における承遠、はたまた五臺山の法照のごとき、その傳統を承けて、あるいは淨土道場を開き、あるいは般舟道場を開き、念佛の專修を行つたことは衆知するところである。これに對して知玄が資聖寺にあつて行つた結社の交渉が果して、白蓮社のごとき專修念佛を中心とし

たものであったか、それとも擬結蓮社とはたゞの形容詞句であつて單なる佛教信仰仲間の交友關係を述べたに過ぎないものであるかは、こうした簡單な記載法のみをもつてしては決定し難い。そしてこのことについては後にも觸れるつもりであるが、こゝで特記したいことは知玄の傳記中から彼のみにとゞまらず、楊茂孝および楊魯士らを探り出すことができたということである。何故ならば茂孝と魯士とがまた圓仁と深い關係を持つに至つたことが彼の行記や大師傳によつてこれまた證明しうるからである。

さて、「入唐求法巡禮行記」によれば、圓仁が五臺山を降つて、燒けつくような山西盆地を南下し、あこがれの長安に達したのは開成五年八月廿日であつて、清涼の山を出でてからは、四十五日を経たわけである。秋の訪れの早い關中はこの頃になると好天氣に恵れ、空は澄みわたり、さわやかな風が異國の旅行者の肌にも快かった。春明門外の鎮國寺の西禪院で二夜を明した一行の四名は二十二日には城内に入り、朱雀大街靖善坊の大興善寺に至つて宿を請うてから、翌日さらに資聖寺に居を移した。圓仁が大興善寺に住せず、資聖寺に宿ることゝなった理由は、偶然にも左衛

功德使仇士良の部下の知巡押衙・監察侍御史の趙鍊が紹介して呉れたためということ以外に、同月二十五日に仇士良から當分の間、資聖寺内に住居せよとの許可が出されたためでもあらう。とりあえず一夜を同寺の庫裡の西側の亭内で明したのち、淨土院内に移ることとなつた。この淨土院というのは塚本善隆博士も指摘しておられるように、寺中の單なる僧院の名稱ではなくて、淨土教の専門道場をも意味するところであつたと解される。こうした淨土院は長安では資聖寺の外にさらに實際寺・章敬寺・大雲寺・興唐寺・溫國寺・薦福寺・青龍寺などにもあつたことが知られ、それぞれまた專修念佛の道場であつたと認められている。したがつて圓仁がこの淨土院内に止住することになつたため、その結果として彼と淨土教とに特別な關係が結ばれる因縁の一となつたことも思い合されて興味を覺えしむるものがあるのである。

この淨土院の院主は安道といひ、一行に對して頗る慰懃であつた。かくて圓仁は會昌元年十二月三日まで約一年三ヶ月餘りを淨土院中において暮した。その後、さらに同寺の西院に移り、同五年五月、長安を去るまでは西院を宿所

としたわけである。

ひるがえって知玄が資聖寺にはじめて居住するようになった年代は何時のことが明かでないが、すでに開成の初めにはこゝに居住していたのであろう。そして、行記中にはじめて知玄の名の現われるのは開成五年十二月八日の條である。これによれば

勅に准じて諸寺に行香設齋す。當寺は李德裕宰相および勅使が行香せらる。これ大曆玄宗皇帝の忌日なり。すべて官物を用いて齋を設く。當寺の内道場三教談論大徳の知玄法師が表讃したまう。

とあるのである。東寺觀智院本は大曆玄宗皇帝となつてゐるが、十二月八日は敬宗の忌日であるから、もとこれは寶曆敬宗皇帝とあるべきで、筆寫の際に誤つたのであろう。同一寺院内に住んでいた知玄と圓仁との交友關係が當時どの程度のものであったのかこの記載のみでは如何ともなし難いが、行記にはその後、幸にも數ヶ所に互つて知玄の名を見ることが出来る。以下すこしくそれについて述べてみよう。

會昌三年七月二十四日の夜の二更のことであつた。この

とき最愛の弟子惟曉は約八ヶ月にわたる病臥の後、遂にわびしくも異郷にあつて短い生涯を終つた。⁹⁾ 同月二十七日、彼のためさゝやかな埋葬が行われたが、葬儀の模様について述べた簡略とはいえ、哀感のこもつた圓仁の行文に再び知玄の名が見出されるのが第二回目である。すなわち、

墓を覆う。同院の僧惠見・僧宗信もつばら葬事を勾當す。淨土院の僧懷安は送殯人の供をば設く。送殯の僧思誓・僧敬中・僧懷約・僧惠見・僧宗信。當寺の内供奉三教講論大徳知玄法師は同學僧可從を遣して送殯して葬らしめたまう。送殯して城を出するの人、僧俗ともに計十餘人。墓において殯前に七僧を請じて稱名し十念咒願す。

とあるところのものである。同院というのは圓仁の宿院である西院を指すのであろう。その他淨土院の僧侶らも葬儀に會した。僧俗併せて十餘名、中に知玄の名代として可從が加つたのである。こゝに到つて知玄と圓仁との交友の深さを或る程度窺うことができるというべきであらう。資聖寺にあつて圓仁は惟曉の菩提をとむらうべく、三七齋・五七齋・七七齋をいとなんだ。九月十九日が七七齋に當つたが、その注文に「毎度、内供奉を請ず」とあり、この内供

奉⁽⁵⁾とは申すまでもなく知玄のことであつて、彼をその都度、法要齋會に請じたことを明かにしうるのである。但し、滿百日に當る十一月三日にはたゞ惟曉の百日齋とあるのみで、果して知玄を請じたかどうか明かでない。これについてはさらに後に觸れる機會を持ちたい。

さて、こゝでしばらく方面を變えて楊茂孝と楊魯士について一考してみたい。けだし茂孝とは申すまでもなく楊敬之の字である。その傳は極めて簡略ながら「新唐書」卷一六〇に掲げられているところであつて、彼は楊凌の子で、元和の初に進士に及第し、右衛冑曹參軍から屯田郎中・戸部郎中などに歷任し、その後李宗閔の黨のことに坐して建州〔廣東省連縣に治す〕の刺史に貶せられたことがあつたが、文宗の時にわかに召されて國子祭酒となり、いくばくもなく太常少卿に轉じ、さらに大理卿となり、檢校工部尚書兼國子祭酒に任じた。今日ほとんど傳存してないが、文章が上手で、その華山賦⁽⁶⁾は韓愈や李德裕の賞讃を拍したという。さらに上掲したように知玄の傳中には彼が曾つて涅槃經に注し、自ら謝靈運に倣わんとしたことも見える。彼に對し求法行記には會昌五年五月十五日の條に、

大理卿中散大夫賜紫金魚袋楊敬之は曾て御史中丞に任じたまう。專使をして來らしめ、何日に城を出で何れの道を取りて去らるゝやと問われぬ。兼て團茶一串を賜う。

とある。排佛の狂嵐は遂に在留中の外國僧侶にも及び、圓仁一行も還俗して歸國せざるをえず、この日、無限の感慨を懷きながら長安をあとして萬里の長途についたのであつた。春明門を通過し、送るもの送らるゝもの路傍の茶店に立ち寄つて別離を惜んでいるとき、再び楊敬之は使人を差し手紙をもたらしいうに「弟子の書狀五通、兼ねて手書して前路の州縣の舊識の官人の處に附送せり。たゞこの書をたずさえて通入せば益するところあらん」と。文中の五通の書狀とは東都の崔大傳、鄭州刺史の李舍人および任判官、その他汴州節度副使裴郎中、同じく竹兵馬使への紹介狀であつた。圓仁が旅行の途上、これらの書狀によつて甚大な便宜をえたことは行記にその都度明記されているごとくである。⁽⁸⁾

他面、楊魯士についてもまた「舊唐書」卷一七六楊汝士傳中に簡略な記載を見出すことができる。それによると魯士は汝士の弟で、字を宗尹といい、殷士がその本名であつ

た。楊虞卿・楊漢公らの従兄弟にあたり、一門の邸宅は左街の靜恭坊にあつて、唐末の望族として知られている。しかるに殷士は穆宗の長慶元年(八二一)に進士に及等したが、たまたま詔により翰林院で覆試⁽⁷⁾に應じたところ鄭郎らと共に不合格となつた。そのため世人の惡評をまねき、時あたかも右補闕に任じていた兄汝士はこの事件に連坐して開江〔廣西省昭平縣〕の縣令に貶せられるという始末であつた。汝士はその後、召されて京官となり、文宗時代には刑部尚書にまで陞進したが、殷士は後に制科で登第⁽⁸⁾はしたものの、覆落事件が生じたため、大した榮達もなく終つたようである。魯士と改名したのもその事件に關係があると解される。彼に對して行記には上掲の五月十五日の條に續けて左のごとく記している。

職方郎中賜緋魚袋楊魯士は前に曾て相奉じて寺に在りしとき慇懃に相問せらる。またかつて數度、寺に到りて檢校せられ、かつて絹褐・衫褲などを施されぬ。今、郎君をして書をたずさえて來らしめ、路絹二疋・蒙頂茶二斤・團茶一串・錢兩貫文と前路の書狀二通兩封をたまわり、別に書狀あり。

職方郎は兵部の官で、天下の地圖や境界などを掌る職であるが、四夷の歸化などに關する業務も扱つていた。行記に數度、寺に到つて檢校したというのはかゝる業務上から外國僧侶に對しても取調べをしたのであるかも知れない。しかし、魯士と圓仁との關係はむしろ知玄のもとにおける集い、所謂擬結蓮社の關係により多くを歸すべきではあるまいか。かくて楊敬之・楊魯士らが何れも知玄の關係で圓仁とは特に親しい間柄となつたことが知られるのであるが、こゝに注意すべきことは同日の記事中にさらにまた左のとき一條をも發見することである。

〔萬年〕縣中にありて狀を修めて内供奉談論大德に報謝す。去年、郷に歸りて消息をえざりしに、今潜かに來りて、頭をつゝみて楊卿の宅裏にあり。童子清涼をして書をたずさえて來らしめぬ。書中に潜別の言あり。甚だ悲惨なり。

こゝに萬年縣というは左街宣陽坊にある縣衙のことである。圓仁はそこにおいて書狀をしたためて内供奉談論大德に對して別離の挨拶と多年の厚情を謝したのであるが、いうまでもなくこの大德こそは知玄その人に外ならない。これ

によると知玄は去年、故山に歸つたと聞いていたのに今ひそかに楊敬之の宅内にひそんでいることを知った。そればかりでなく、童子の清涼に命じてたずさえ來らしめた書狀が通り一遍の挨拶狀でなかったことを物語っている。「書中に潜別の言あり、甚だ悲惨なり」と、數語ではありながら知玄と圓仁との關係の深さをも推さしむるに充分なものがあるといえるのである。

註

①高元裕。字は景圭。渤海の人。文宗から宣宗時代の高官として知られた。文宗のはじめ李宗閔の黨のことに關係して閔州（四川省保寧縣）の刺史となつたが、後に御史中丞・京兆尹・山南道節度使などに歴任し治績があつた。「舊唐書」卷一七一「新唐書」卷一七七に傳がある。

②塚本善隆博士「唐中期の淨土教」頁一〇九—一一〇・一八五—一八八參看。

③惟曉をはじめは請益僧の儼從で、圓載の儼從の仁好と共に揚州の開元寺において剃髮したのである。時に開成三年十月十三日であつた。これより先、九日には圓仁が彼のため三衣を作製してやつている。しかし揚州において、惟正と共に受戒せしめようと官に願ひ出たが許可されなかつたものと見える（十月十九日）。赤山の法花院に滞在中には師から親しく因明論疏の講讀を受け、開成五年五月十四日に五臺山竹林寺の白玉戒壇で惟正や中國の數十人の沙彌らと共にはじめて具足戒を受けた。さらに「慈覺

大師傳」には

會昌三年七月。弟子惟曉身亡。惟曉天性聰朗。器量弘雅。深志法門。遠隨大師^一。遂殞命於茲^二。大師深愍之。

と見え、彼の資性をたゞえると共にその死去をおしんでいる。なお圓仁と同行した弟子惟正の歸朝後の消息は殆んど不明であるが、幸に東大寺圖書所藏の「百法顯幽抄」卷第一の末尾に左のごとくあることを紹介したい。

亘唐會昌三年十月廿一日 上都資聖寺寫畢 惟正記

貞觀十四年二月廿五日 聽聞畢 比丘令秀

傳法師 前入唐求法惟正大師尚

（異筆）傳授 比丘喜靜謹記

これによつて歸朝後大和尚となり百法論の講義を行つてゐることが知られる。この書は沙門從方の述で、「入唐新求聖教目錄」に十卷とあるものに當るのである。ちなみに一行の行者丁雄滿は圓珍の入唐にも従い、長安城内の路上偶然にも法全と面會し、法全と圓珍とを結ぶ結果となつたことは「行歷抄」に明記するところである。法全・圓仁・圓珍の關係は他日記してみたい。

④「舊唐書」卷一七敬宗本紀に寶曆二年十二月辛丑に崩御したとある。辛丑は八日に當る。

⑤内供奉の官を僧侶に與えられたのは肅宗の至德元年、僧元皎が始めといわれ、ついで子麟がこの職をつぎ、憲宗時代には端甫・皓月・栖白らが相次いで任ぜられた。唐代には禁中に内道場を設けて佛事を謹修したが、文宗時代には長生殿内にこの道場が置かれ、内供奉の大徳はこゝに出仕した。（「大宋僧史略」參看）

⑥華山賦「全唐文」卷七二一所收。

⑦覆試とは本試験の前後に行う再試験のことで、主として受験の不正などを防ぐためのものである。翰林院で行ったというところを見ると恐らく會試の後、殿試の前に行われたであろう。清代になるとかゝる覆試は試験の都度行われた(宮崎市定博士「科擧」頁一〇五—一六〇)

⑧會昌五年五月二十二日・同六月一日・同六月九日および同六月十三日の條。

⑨制科。天子が特別の科目を課して士を擧げること。「文獻通考」選舉第六に、制科則天子親策之、親覽之、升黜之。權當一出於上。と説明している。この方法によつて士を擧げるを制擧ともいう。唐代には制科の名目が多く、それによつて士に擧げられる場合もあつたが、天子自らこれを行うことはなく、すべて有司に任せたといわれる。

三

天子の誕生日に行われた儒佛道三教の談論について贅寧の説くところによれば以下のごとくである。漢の高祖と盧綰とは同日生れであつたので、その誕生日には酒饌を互に贈り合つた。これが慶生の起源である。しかるに後には誕生日を祝して束帛・壺酒をたがいに贈り合う風習が起り、孩兒の場合には衣服・玩具の類を用い、大人に對しては玉

帛を用いて賀するに至つた。これは長命の意を物品に屬して誕生を慶祝したものである。しかるに佛教にもまた弭災延命の説のあることを知り、佛事によつて誕生の慶祝が行われはじめた。北魏以後周隋におよんで、朝廷では天子の誕生日に名高廣學の僧侶を召して儒生道士と對論せしめ、かゝる儀式により王道の榮え、天壽の久しきことを慶賀した。唐の高宗の時には賈公彥が道士・沙門と講説し、徳宗の時には麟德殿で許孟容が道士・沙門と談論した。ことに貞元十二年の誕生日の際には給事中徐岱・兵部郎中趙需および許孟容・韋渠牟らをして道士の葛成、沙門の談筵ら二十人と講論せしめた。文宗の時には白居易・僧惟澄・道士趙常盈らの談論があり、白居易は大いに面目をほどこしたと。
(「大宋僧史略」卷下)

さて文宗の敬信をえた知玄は果して何年頃内供奉三教談論大德に任命されたか。上掲した行記の記事によつて開成五年十二月八日以前であつたことは疑いなく、しかもこの時は武宗がすでに即位しているのであるから、少くとも文宗の在位中に溯ることは知玄の傳と合せ考えることによつて明確にできうるのである。しかし當該の談論が行われた

のは勿論、武宗の時代になってからであつた。すなわち傳によると「武宗の即位するや德陽日に際し召されて麟德殿で道士と談論す」とあり、この「即位するや」とあるのを文字通りに解すると、開成五年の六月十一日の談論の際だつたとされないでもない。「舊唐書」本紀によるとこの年の五月には中書省が奏上して、帝の誕生日をば慶陽節と稱するようにと献言している。いまだ先帝の諒闇中ではあつたが、武宗の誕生日の甚だ盛大に慶祝された有様は折柄五臺山中でその日に際會した圓仁の行記の一節をもつてしても推測出来るものがあるであらう。すなわち、

〔開成五年六月〕十一日。今上の德陽日。勅して五臺諸寺において降誕齋を設けしむ。諸寺は時を一にして鐘を鳴らし、最上座の老宿五六人、座を起ちて行香す。聞くならく、勅使金闍寺に在りて行香し、京に歸りたまひぬと見えているのである。五臺山中にあつてかくのごとしとするならば、宮中における慶祝のさらに盛大であつたことは想像に困難ではあるまい。しかるに「佛祖歷代通載」卷一六では知玄の談論を會昌三年の條に掲げ、「釋氏稽古略」卷三はこれを會昌四年三月の條に掲げ、「佛祖統紀」卷四二

ではこれを會昌五年正月の條に掲げるなどそれぞれ相違していて歸一するところを知らない。果して然らばこのうちで何れの年月をもつて當該談論舉行の時とすべきであろうか。また「佛祖統紀」以下の各書に掲ぐる年次に果して何かの根據があるであらうか。

そこでこれと關連した別の方面からの考究を試みることにしよう。すなわち仇士良についてである。何故ならば知玄傳を信憑する限り、彼の死去が知玄の失脚問題の年次を限定する一つの鍵でもあるから。

さて圓仁に對して保護者でもあり、監督者でもあつた仇士良は武宗即位前後は左神策護軍中尉兼左街功德使として、朝廷における隠然たる權力者をもつて自他ともに許していた。ことに武宗の援立に與つて力のあつたことから、即位後は驃騎大將軍となり楚國公に封ぜられるなど厚遇ならびなかつたのである。しかしそれは表面上のことで、武宗は内心では彼を嫌つた。そして、新たに淮南節度使の李德裕を起用して宰相とすることになり、やがて德裕が着々實權を掌握するや、仇士良は逆に不安を感じざるをえないもののあるに至つた。彼は會昌三年には觀軍容使兼統左右軍な

る最高の権力的な官職に任じていたが、たまたま病を發し、その任にたえないので、内侍監知省事に轉じ、さらに隱退せんことをも願ひ出た。その時の事情は「新唐書」卷二百七や「資治通鑑」卷二百四十六などに見えるごとくである。さらに行記によると左のような記事をも發見する。すなわち會昌三年六月三日の條に

軍容は官を辭して宅に歸る。向前、五六度表をすゝめて家に坐せんことを請えども、勅してゆるしたまわず。重ねて表を進めて請う。五月に勅あり、ゆるして家に歸さしむ。仍つてすなわち家具をはこび、三日に至つて軍容は官を辭して宅に歸りぬ。勅して新中尉を除したまう。内長官特進の欽義をもつて左神策護軍中尉に任ず。當日すなわち任に上りぬ。

とあるものである。軍容とは觀軍容使の略であつて、「資治通鑑」では仇士良が觀軍容使となつたのを會昌元年八月の條にかけ、「新唐書」の傳では同三年のこととしてゐるが、行記は同二年二月一日の條に「勅して仇開府に加蓋して觀軍容使に充つ、すなわち天下の軍事をつかさどらしむるなり」とあつて、二年のことになつてゐる。なお内長官とい

うのは恐らく内侍省の長官、すなわち知内侍省事に該當するであろう。知玄の傳には内樞密使であつたとあるから、内樞密使をも兼ねてゐたであろう。行記によれば士良が官を辭したのは楊欽義が左神策護軍中尉に任じたことであつて、欽義についても注目すべき消息を傳へてゐる。⁽²⁾ さて隱退した仇士良が間もなく死去したことについては「舊唐書」武宗本紀に

〔會昌三年六月〕左軍中尉楚國公仇士良卒

と見える程度で、新書の本傳のときその月すら明かにしていない有様であるが、行記は六月二十三日の條に

仇軍容薨す。勅して孝衣を送る。

とあり、その死去の日の二十三日に當ることを明かにしてゐる。かくて上記のように三教談論における知玄をもつて仇士良の生前のこととするならば會昌三年六月二十三日以前の出來事としてこれを限定しうることもなるであろう。ひるがえつて行記を披見すると會昌三年以前における三教談論についても亦それぞれ記録を残してゐる。今、それらを掲げるならば次のごとくである。

〔會昌元年〕六月十一日。今上の降誕日。内裏に設齋あり。

兩街の供養の大徳および道士集りて經を談す。四對の論義あり。二箇の道士は紫〔衣〕を賜わることあり。釋門の大徳はすべて著くるをえず。

〔會昌二年〕六月十一日。〔今〕上の徳陽日。大内には降誕〔齋〕あり。兩街の大徳、道士と對して御前に論議す。道士二人は紫〔衣〕をえ、僧門は紫〔衣〕を著くるをえず。

〔會昌三年〕六月十一日。今上の徳陽日。内裏に設齋あり。兩街の大徳および道士ら御前に論議す。、、功徳使は巡院に帖して大徳を簡擇せしめ、毎街各々七人が舊例によりて入内す。〔大〕徳は道士に對して論議せり。道士二人には勅して紫衣を賜う。しかして大徳はすべて紫〔衣〕を著くるをえず。

かくて會昌初年以來三回にわたって行われた三教談論に對する記録が見られ、これにより何れの場合も道士が賞讃をえて、僧侶は冷遇されたことを知る。李唐は老子を同姓の故をもつて尊崇し、道教に對しても厚遇したのであるが、特に武宗は即位以前から道教に親しみ、爾來狂信した。これに對しては佛教信者の仇士良も如何ともなし難いものがあった。

さて圓仁は三教談論に参加した大徳の名をあげていないので、これによって知玄の直言が何年の時のことであつたかを定めることは出来ない。しかし、開成五年におくことだけは全く不都合であるといえよう。何故ならばその十二月には彼自ら敬宗の國忌の表讃を行つていたのであるからである。若し帝の不興を蒙つて失脚したとなると、いくら居住してゐる寺院であつてもこうした公的ともいふべき法會の表讃を自ら行うことは謹慎し遠慮せざるをえないのが普通である。かくて殘された會昌元・二・三年のうち何れかということになるのであるが、恐らくそれは三年の降誕節の際ではなかつたか。何故ならば上掲した會昌五年五月十五日の條に、知玄が「去年、郷に歸りて消息をえざりに、今潜かに來りて、頭をつゝみて楊卿の宅にあり云々」と見え、この記事から同四年頃には知玄の一度四川に歸つた事實を窺わしむるものがあるからである。

かく考えてくると會昌三年六月十一日、天子の不興を蒙つた知玄は謹慎の身としてしばらく資聖寺内にとゞまつていたであらう。惟曉の逝去はそれから約一ヶ月後のことであり、その四十九の法會までは確かに齋會の導師であつた

ことが知られるのである。その後ひそかに彼は長安を去り、約一年の後にふたゝび長安に戻り來ったのではなかったか。「佛祖歷代通載」が當該三教談論を三年の條に掲げた根據は不明であるが、こゝに推定した結果とは暗合することゝなるのである。

註

①「佛祖統紀」卷四二には太和元年十月の降誕節に白居易が安國寺義林や上清宮楊弘元と談論したと述べている。そのもとづところは白氏文集に據つたと述べているが、「舊唐書」卷一六六の白居易傳は贊寧と同じく惟澄および趙常盈となつてゐる。

②楊欽義が淮南の觀軍容使として李德裕の在鎮時代共に任にあつたことは「資治通鑑」卷二四六に記することである。それによれば初め德裕は彼を冷遇したが、後には情禮厚くなり、まもなく欽義は召されて知内樞密事に轉じ、かくて德裕の宰相になつたのも欽義の推輓が與つたと見える。「求法行記」卷一、開成三年十二月八日の條には敬宗の國忌に當るので、揚州開元寺で五百僧齋を設けて法要が行われ、その際相公と將軍とが出席したと記し、儀式の有様なども詳述している。この相公が李德裕であることは明かである。これに對し將軍とは恐らく監軍（觀軍）または軍容などあるべきを誤つたもので、翌正月十八日の條に監軍門とあるのが正しいであらう。果してしからは當時の觀軍容使は楊欽義であつて圓仁も面接したのである。

四

知玄の傳によると彼の著作として左のごときものがあげられてゐる。すなわち

如來藏經會釋疏二卷

大無量壽經疏二卷

勝鬘經疏四卷

とあり、さらに般若經および金剛經などの疏なども作つたことが見える。この他禮懺文六卷、釋氏雜文あるいは外篇箴論および碑誌歌詩などがあつて、合せて二十餘卷に及んだという。

さらに圓仁の「入唐新求聖教目錄」をひもとくと、次の三種がまた彼の著述であつたことを知る。それは

長安左街大薦福寺讚佛牙偈一卷 内供奉三教講論
大德知玄述

長安資聖寺粥利記一卷 内道場談論
沙門知玄撰

大報無遷論一卷 講論沙門
知玄述

とあるものである。同目錄にはなお

十四音辨一卷 沙門智
玄述

とあるものが注意される。著者は智玄となつていて輕々し

く知玄と同一人と決めるわけにはゆかないように思うのであるが、これについて左に少しく考證を加えてみることにしよう。

知玄のことを智玄と書いている場合が他の例でも見られることは、例えば彼と親交のあつた李義山の詩には、別智玄法師（『玉谿集』卷三）なる題名があり、中晚唐時代の詩人として知られている劉得仁にもまた送智玄首座歸蜀中舊山（『全唐詩』卷二十）一首があり、この智玄も蜀中の舊山に歸るなどあるところから知玄に外ならぬと考へられる。

さて「十四音辨」は安然の「諸阿闍梨眞言密教部類總錄」卷下、悉曇解釋三の條にも掲ぐるところである。それには十四音辨 一卷 如玄 仁

とあり、その書の圓仁將來本によつたものであることが窺われると共にこの方は著者が如玄となつてゐるのである。大正藏經卷五十五目錄部に掲げるところの脚註によると康保二年（九六五）の抄本では初玄となつてゐるともいふ。かくて初・如・知はやゝ字形も相似しているから書寫の際魯魚の誤りをおかし易く、もと知玄とあつたものが何時か如玄・初玄と訛傳したのではあるまいか。

ひるがえつて思うに知玄が悉曇に關して相當の造詣のあつたことは幸に「宋高僧傳」卷三の滿月の傳に記された内容からも窺われるのである。やゝ長文ではあるが左に引用してみることにする。すなわち、

釋滿月者西域人也。爰來震旦。務在翻譯。瑜伽法門一皆貫練。既多神効。衆所推欽。開成中進梵夾。遇偽甘露事、
、不暇翻譯。時悟達國師知玄好學。聲明、禮月爲師。情相欵密。指教梵字及音字之緣界。悉曇八轉深得幽趣。玄曰、昇哉。吾體兩方之言。願參象胥之末、可乎。因請翻譯諸禁呪。

とあるものである。これによると西域出身の滿月が來朝したのは文宗のはじめ頃であつて、その時、天子にたずさえてきた梵夾を奉つたが、甘露の變によつて、朝廷では翻譯などを行う餘裕のない有様であつた。その際、知玄は滿月と交友して聲明や悉曇などを學ぶと共に眞言の翻譯なども行つた。知玄を評して、悉曇八轉深く幽趣をえたりと述べてゐることから推して、彼にまた「十四音辨」一卷があつたとしても恠しむには足らないであらう。

殘念乍ら知玄の著述は上記のような題名の外には殆んど

残つておらず、今日ではわずか三篇の詩が「全唐詩」に採録されている以外、後に紹介する一篇の跋文があるに過ぎない。しかしこの書題中であつてすくなくぬ興味を惹くものがある。それは「長安左街大薦福寺讚佛牙偈」一巻である。何故ならこの書が行記の會昌元年二月八・十日の記事と若干の関連を以つて思い出されるから。左に日記の譯文を掲げてみよう。すなわち、

三月八日より十五日に至るあいだ薦福寺は佛牙を開いて供養す。藍田縣も八日より十五日に至るまで无碍茶飯を設け、十方の僧俗ことごとく來り喫う。「薦福寺は」左街の僧録の鉢虛法師が會主となりたまう。諸寺、赴集しておのおの珍供を設け、百種の藥食、珍妙の異花・衆香、嚴備して佛牙を供養す。および供養樓の廊下の敷設はあけて計うべからず。佛牙は樓の中庭にあり。「僧俗は」隨喜讚歎し、城を擧げて赴き來り、禮拜供〔養〕す。ある人は百石の粳米、二十石の粟米を施し、ある人は无碍供の餽頭を〔施して〕足らしめ、ある人は无碍供の雜用錢を施して足らしめ、ある人は无碍〔供の〕薄餅を供して足らしめ、ある人は諸寺の大徳老宿に供を施して足らしむ。か

くのごとくおのおの發願布施し、佛牙會を莊嚴ならしめ、佛牙樓に向つて錢を散すること雨のごとし。求法僧らは十日にかしこに往き、隨喜して佛牙樓に登り、佛牙を見て頂戴禮拜す。かねて醺經院に入り、義淨三藏の影を見たり。壁上には三藏が摩頂したまえる松樹を書けり。

と記している。申すまでもなく薦福寺は長安左街の開化坊にあり、皇城の南方、朱雀街に近く位置した巨刹である。

高宗が崩御した直後に創建され、はじめ獻福寺といい、天授六年(六九〇)薦福寺と改稱された。神龍以後、勅建の醺經院もおかれ、坊を別にして建造された佛塔は今日も小雁塔とよんで、慈恩寺の大雁塔と共に名高いのである。それは兎に角とし、圓仁が親しくこの寺の佛牙會に詣で、そこでえた印象の少くないものゝあつたことは文中に躍如としているといえよう。他面、圓仁は歸朝の後、貞觀二年に叡山で舍利會をはじめて行うことゝなつたことが思い出される。源爲憲の「三寶繪詞」比叡舍利會の條には、

舍利會は慈覺大師はじめて行える也。、、、承和十四年に此國に歸り來て、多くの佛舍利もてわたれり。貞觀二年に此會を始めて行いて總持院につたえおけり。多くの

色衆をとゝのえたて、二り別當を差すことは長きことゝなれば人の力のたうるにしたがう。日は定まれる日もなし。山の花のさかりなるを契れり。

と記している。舍利會に用いられた舍利については貞觀二年の修舍利會狀に

圓仁、在大唐日、傳法和尙等、所付授也。亦有先師所得矣。圓仁親見大唐盛修此會。何不我山遵行彼法。然則不可取置藏中、必應時奉禮供者。於總持〔院〕塔下、始自今年終未來際、採花燒香、至心禮供。三月花序、是爲期焉。

と見える。すなわち用いるところの舍利は唐土の傳法和尙が授けしものと先師最澄が將來したものとして、その儀式は大唐において圓仁が親しく見るところに依ると述べている。⁽¹⁾ 將來目錄によると揚州で菩薩舍利と辟支佛舍利とをえて、遣唐使の歸還に際して托したとあるが、こゝに記すごとく或は録外のものとして別に傳法の和尙らから授けられた舍利もあつたのか知れぬ。そもそも彼が長安において親しく見聞いた佛牙會は、興福寺・崇聖寺・莊嚴寺などが数えられ、その他藍田縣における例などもあつた。しかし勿論、

もつとも深い印象を與へたのは薦福寺の佛牙會であつたに相違ない。そして圓仁がこゝに詣でたときに、集まつた大徳中に知玄が居合せたか否かは問題外としても、彼に上記のごとく「薦福寺讀佛牙會偈」のあることはその佛牙會と知玄との間に何等かの關係が有つたことも想像に困難ではないであらう。

なお前に觸れた一篇の跋文とは「天台霞標」卷一に収められているところのものである。やゝ長文であるがそれを左に引用することゝしよう。

所示顯戒論、周覽已畢。絶是佳作。實可謂遠符天竺近契神州。據經論之明文、得賢聖之深意。本朝綱統、^{モトメ}駿^ニ僞辯於當時。東國名公、耀眞宗於永代。是使小乘中根之類、一言反誤於目前、大乘上座之文、三寺傳芳於天下。況乎千年像教、正今東流、彼土盛揚。固其宜矣。

文首に「示すところの顯戒論は周覽すでおわりぬ」とあるによつてこれは何者かが最澄の「顯戒論」を示したので、通讀した後これに知玄がその感想を記したものと解される。しかるに「天台霞標」にはその標題に知玄法師の書とあるのみで、これが如何なる抄本に採録されていたものである

のか、この文が如何なる経緯でできたものであるのかについて全く記すところがない。けだし「顯戒論」は弘仁十年に執筆し、さらに翌年二月にこれを嵯峨天皇に上表したといわれる。したがって早ければ穆宗時代にはすでに唐土に將來されたということも有りえないわけではないが、わざわざこれを傳えたのは、恰も聖德太子の「勝鬘經義」一卷⁽²⁾が揚州に傳つた場合と同様わが國の名著を彼に誇示するという理由もあつたのではあるまいか。差し當つて彼の弟子である圓仁・圓載・圓珍らが將來者として考慮にのほつて來る。ことに圓珍が渡航した際は校勘用として四百五十卷の經疏類⁽³⁾をたずさえて行つたというようなこともあるから、その中に「顯戒論」がふくまれたとしても別に不思議ではない。そして彼が長安滞在中、知玄に面會して披見せしめるというような場合もありそうである。しかし現存している限りの圓珍關係の文書からはそうした兩者の間の交渉を窺わしむるものは存していない。あの來歴記錄の多い圓珍のことではあるが、知玄について現存一言片句を残していないところを見ると、たとえ五卷あつたと傳える行歷記が完存していても、果してそうしたことの見出されうる可能性

があるかどうか。消極的であるものゝ、矢張り圓仁が「顯戒論」を携えて行つたと考へるのが却つてもっとも蓋然性に富むと思う。彼があゝの困難な旅行の際にも肌身はなさず師の著を持つていて、かの地の大德に示してその批評を仰がんとしたのではあるまいか。かくて一代の學僧であつた知玄の跋文をうるこゝなつたのだと解釋したのである。

註

①修舍利會狀は「天台霞標」三ノ一に收められている。それは貞觀二年二月十日の日付で、同年四月第一回の舍利會が行われた。「慈覺大師傳」にも四月始行「供舍利會」。自爾以降此會不斷と見えている。

②唐の揚州法雲寺の僧明空が撰した「勝鬘經疏義私鈔」(「大日本佛教全書」所收)卷一に今上宮王疏所釋。即是後譯經(「求那跋陀羅譯」。有二十一紙。其疏大曆七年、日本國僧使誠明得清等八人、兼法華疏四卷、將來揚州與龍興寺大律師闍梨靈祐。其上宮王是安南都護晁衡姑也。相傳云、是梁南嶽高僧思大禪師後身とあり、大曆七年すなわち寶龜三年に入唐した誠明・得清らが揚州龍興寺の靈祐に聖德太子の法華經疏と勝鬘經疏を贈つたことが知れる。明空はそれにもついでこの私鈔六卷を撰し、これがまた圓仁によつて逆にわが國へ將來される結果となつた。(「入唐新求聖教目錄」では一卷となつている)。太子に南岳惠思後身説があり、したがつてその撰述をたゞ誇示するといふばかりでなく、かゝる關係からその義疏が特に彼地に

もたらされたのであろう。ちなみにこの説明は大安寺の戒明と同一人である。

③圓珍が四百五十卷の經疏類をたずさえて渡唐したことは入唐公驗・福州都督府公驗・温州安固公驗・温州横陽縣公驗などに明記されている。これは彼土の正本と校勘せんがためであった。

④行歷記は「天台霞標」二編卷二に一卷あるいは五卷と見える。圓珍の入唐巡禮の紀行日記であつて、「在唐巡禮記」五卷というのがその本名と思われ、「諸宗章疏錄」中にもその名で掲載されている。現存の「行歷抄」はその抄本でわずかに一部分を窺うのみである。なお「天台霞標」初篇卷二にはこの他に「續在唐巡禮記」三卷もあつたというが、兩者の關係は不明である。

五

思うに日唐文化交流史上における圓仁の一般的な評價は最澄や空海が現在えている高さに比較して、一部の史家を除いては未だ當然與うべきところまで達していないように考えられてならない。圓仁も請益僧としての入唐であつたから、若し順調な往還であつたならば、たかだか祖師の靈場を巡拜し、併せて一山の疑問の決答を求めたという程度にとどまつたであらう。しかるに事と志とが相違し、願い出た豫定の求法巡禮は不許可となり、一時は空しく歸還の途につくことゝなつた。しかし、その宗教的熱情は彼を

驅つて海州に上陸せしめ、その失敗にも拘わらず、新羅人の厚意をえてさらに文登縣の赤山に滞留しやがて所期の志望を果すべき結果となつた。かくてその前途には五臺聖境の巡禮というような當初は全く豫想しない方向が待ちかまへ、しかもそこですぐれた靈感の數々に接し、幾多の感動的な印象をもえたのである。さらに長安における六ヶ年の生活は彼に對し一層豊富な體驗を與うるものであつた。後世、十三重の灌頂と呼ばれているように、圓仁の受けた灌頂のみでも十三種に及んでいる。⁽¹⁾

歸朝後における大きな仕事としては、叡山に建立した灌頂堂・文珠樓・常行三昧堂・前唐院などの建立あるいは五會念佛の提唱、舍利會の創始、さらに最澄のはじめたところではあるが法華懺法や天台大師供に對してその儀式や行事に新しい様式を加えて整備したものとするなど、思いつくまゝに數えたのみでも五指に餘るものがあるのである。

彼は最澄空海がいまだなしえなかつた金剛頂・蘇悉地業を制定し、次いで「金剛經疏」七卷「蘇悉地經疏」七卷を撰し日本密教教史上に新しい境地を開いたといわれる。⁽²⁾ 他面には常行三昧法五會念佛を導いてわが淨土教史上に不動

の位置を占めることゝなった。あるいはまた讚歎教化⁽⁴⁾のよ
うな佛教音曲にも新しい影響を及ぼしている。その他梵語
學や新漢音⁽⁵⁾のなどに就いてもそれぞれ注意すべき足迹を残
している。しかしこれらについてはすでに多かれ少なかれ、
先學が考究し紹介しているところであつて、専門外のもの
が一々指摘するまでもないことであるといえよう。たゞこ
ゝで特に記したいのはそうした多くの事柄を通じて改めて
看取される一二についてである。それは彼の滯留期間が長
かつただけに見聞も廣く、中唐時代の佛教のみならず、文
化的な事情にも理解が深かつたということである。特に興
味を覚えしめるものは乏しい滯在費用や唐からの恵まれぬ
待遇の結果、言葉を換えると本國の普通一般の僧侶と差し
て變りのないような生活であつただけに、そこには庶民の
近づき易い佛教、例へば俗講・佛牙會・五會念佛⁽⁶⁾のごとき
いわば庶民的佛教と接觸する機會が多くあつたと共に、國
家的貴族的佛教に對する場合でも感受のしかたが異つてい
たであらうということである。それはいわば下から上を見
上げる態度にも似たものがある。もつともこゝで注意しな
ければならないことは庶民的であるからといって、彼の本

質まで捨て去るものではなかつたという點である。換言す
るならば貴族主義的傾向を捨て庶民的態度となるといった
變通無礙なものではなかつた。南都の佛教に對抗せんとす
る叡山の佛教はいわば新しい貴族主義を基盤としたもので
あつて、その傳統を負い、しかも齡五十前後の圓仁が佛教に
對する考え方そのものまでも變るといふことはありえない。

かく考えながら翻つてもう一度知玄のことを思い浮べて
みよう。先ず彼と淨土教との關係である。彼の著に「大無
量壽經疏」二卷があつたこと、印度の聲名に關する造詣は
當時の流行と相俟ち淨土念佛などに對して特に理解を持ち
易からしめたこと、さらに前記擬結蓮社が直ちに阿彌陀信
仰を中心とした結社だとは言いえないとしても、淨土教に
對する資聖寺の環境は決してこれを單なる形容詞句として
片付け去りえないものを持つていたに相違ない點などであ
る。知玄がこのような淨土教と深い關係を持つていたこと
を認めるならば、圓仁に對する交友關係にこの方面におけ
る影響を多少なりとも看取しなければならぬ結果になつ
て來るのではあるまいか。しかし知玄の眞骨頂は固より學
問僧ということにあるのであつて、内外典籍や、梵語にも

通じ、詩文などでもよくしたこと、或は多くの註釋書を作り、さらに三教談論大徳として所謂古今の佛教の理論をよくしたのであった。したがって、知玄と圓仁との交友のごときも深い人間的な接觸を別にする、こうした廣い教學的な佛教というものを媒介としてより結び付き易い性格のものであったのではあるまいか。否それが意識されたものではなかったとしても、高い教學的なもの、ひいては教養的なものがつねに二人の交友の背景となっていたことは無視できない。圓仁自らも唐での身分調書に對して「法華經を講ずることを解す」と記しているように法華經の理解についてまた自信のほどの窺われるものゝあることが思ひ出される。なお蛇足ながら、五臺山の巡禮においては圓仁が却って知玄の先輩であった事實を紹介してこの拙文を結ぶたい。すなわち知玄傳によると

初裴〔休〕鎮荆門。玄遊五臺山。路出渚宮。贈遺初無所収。裴知其儉約。密遣人沿路以供給之。若蘇秦遣舍人陰資奉張儀也。

と見える。この記事は裴休と知玄との關係を記すことを主としたものであるが、裴休が荆南節度使となつたのは大中

の末年頃と考へられるから、知玄の五臺山巡禮は圓仁におくれること十年餘りということになるわけである。⁽⁸⁾

註

①十三重の灌頂については「天台觀懺」五ノ一に收めるところの十三重灌頂秘錄に記することくである。これは全雅・元政・義眞・法全・元侃(簡)・寶月・義操・法潤の諸大徳から傳授したもので、灌頂名や傳法年次が掲げられている。

②「叡岳要記」卷上によると總持院の建立は仁壽三年の董工以來十ヶ年を要したといひ、中に多寶塔や灌頂堂・眞言堂・灌頂阿闍梨房・僧房などがあつた。同書に引用する東塔緣起によれば灌頂堂は仁壽元年の創建であつて、長安青龍寺の鎮國道場になつたともいふ。

③前唐院。「叡岳要記」卷上によればもと檜皮葺五間三面の屋であつた。圓仁歸朝後の平生の禪房であつて、唐から將來の眞言秘教・曼荼羅道具をはじめ天台の教迹、諸宗の章疏や授法の大徳らの影像および圓仁の坐像がこゝに安置されていた。前唐院の名は圓珍を後唐院と稱するところから相對する呼稱であることが知られ、「天台座主記」には仁和四年(八八八)の建立だと記している。なお寛平三年の圓珍の遺言には明確に前唐院と記されているが、この遺言は疑問のものであつたから(「大日本史料」一ノ一・頁八四四)、年代決定の材料には用い難いであろう。

けだし唐から將來した經典類を安置したり、留學僧や渡來僧の居所をさして唐院と稱した例は奈良時代からはじまり、南都では大安寺・東大寺・興福寺・藥師寺などの唐院が知られ、平安

時代においては前唐院と後唐院とがもつとも著名である。

後唐院は園城寺に置かれ、はじめは唐坊といひ、後に唐院と改められ、さらに前唐院に對し後唐院と呼ばれることゝなつた。

「近江國輿地略」卷十には

唐院。樓門より金堂の方に至る大路のさし入り、南の側にあり、南向なり。清和天皇の貞觀元年己卯正月十六日、詔を蒙りて唐朝傳來の胎金兩部曼荼羅の像、并顯密二宗の經書一千餘卷を獻す。勅して尙書省におきて、後園城寺功成るの日、詔して仁壽殿を移し、此地に建て即尙書省にあるところの唐朝傳來の聖教をもつて此房に安置し、題して唐坊という。後に唐院と改、大師、此道場を以て唐の青龍寺に準じ將來の法器を悉く收む。

と見える。ただし園城寺が天台の別院となつたのは貞觀四年であるが、寺傳でもその初年にすでに唐坊ができたとしている。こうした貞觀元年建立説は疑わしいが少くとも同五年以前には唐坊が建立されていたであらう。何故なら圓珍は同五年、この唐坊に壇を設け、兩部大法の傳授を行つてゐるからである。しかし宮地博士も指摘されているように平生、彼はほとんど叡山東塔の西谷の山王院に居住したのであつた。そのため後唐院をもつて直ちに西谷に位置せしめる説もあるほどである。しかしそれは山王院の別稱という程度のもので、所謂後唐院が山門にあつた事實はなく、すなわち唐院ではないと思う。

④ 島地大等「天台教學史」頁二八五・二九四・二九四―三一〇

⑤ 阿彌陀淨土の念佛教所謂五念念佛に對しては五臺山竹林寺に二週間滞在し、その實踐法を學んだ。また華嚴寺においては法照の「淨土五會念佛略法事讚」一卷、「五臺大聖竹林寺釋法照得見

臺山境界記」一卷などを書寫し、長安では會昌元年二月たまたま章敬寺の鏡霜が資聖寺でこの念佛法を傳えたが、圓仁一行はこのとき恰も淨土院に宿在中であつた。また章敬寺沙門弘素の「念佛讚」一卷も將來目錄におさめられている。「三寶繪詞」に、念佛は慈覺大師のもろこしより傳えて貞觀七年より始めて行えるなり、四種三昧の中には常行三昧となづく。仲秋の風すずしき時、中旬の月明なるほど十一日の曉より十七日の夜にいたるまで不斷令行也

⑥ 「巡禮求法行記」卷一に、唐土の僧侶を類別し、その中に化俗法師なるものをあげ、彼らは世間の無常苦空の理を説き、善男善女を教化化導するものと述べてゐる。長安で當時盛に行われた俗講のときはかゝる化俗法師によつて行われたものと解され、善惡應報の因縁圖や佛畫などを壁に掛けそのまゝで歌謡風に抑揚や音節をつけて教化を行つた。圓仁によればさらに同様なことを行ふ僧侶がわが國にもいて、これを飛教化師と呼んだと述べてゐる。飛教化師の名によつて、平安時代以前からかゝるものが行われたことが知られるのである。聲明のときもまた南都を中心として盛に行われ、凝然も圓仁に先き立つて道璿や實忠のことを擧げている（聲明源流記）。この他大佛開眼の際に梵音・錫杖・唄などの行われたことは「東大寺要錄」供養章に見えてゐる。圓仁がこうした聲明のみならずわが國の佛教歌謡にも大きな影響を與えたことは衆知のごとくで、五會念

佛の導入の外に、自らも舍利讃歎や天台大師供の教化を作ったことはすでに高野辰之博士も指摘しておられる（『日本歌謡史』頁二二一～二七〇）

⑦ 高楠順治郎博士「慈覺大師と入唐巡禮」天台宗顯揚會編「慈覺大師」所收

⑧ 飯田利行博士「日本に残存せる中國近世音の研究」

⑨ 俗講についての記載は求法行記の外「因話錄」卷四「樂府雜錄」

「歷代名畫記」「寺塔記」「資治通鑑」卷二四三その他、宋の王灼

「碧鷄漫志」卷五とがある。中について俗講僧文淑と文淑が果して同一人か否かについては、かつて指摘したように恐らく同一人であろうとする考え方は今も變つていない。その後敦煌出土

の變文の研究によつて俗講の實際が一層具體的になつてきた。これらの諸研究は太田辰夫「敦煌文學研究書目」（神戸外大論叢

五ノ二）に掲げられ、最近梅津治郎「變と變文」（國華六四ノ七）那波利貞博士「中晚唐五代の佛教寺院の俗講の座における變文の演出方法に就きて」（甲南大學文學會論集所收）などもある。

⑩ 裴休（七七～八六〇）は宣宗時代の宰相で、諸道塩鐵轉運使を兼ね漕運や稅茶に關して、財政的手腕を示したことで認められているが、佛教に深く歸依して、中年以後は酒肉を遠ざけ、佛典に親しみ、詠歌讚唄など法樂を喜び世人に嘲笑されるほどのこりかたであつた。その節度使に任じたことについては、「新唐書」卷一八二に昭義・河東・鳳翔および荆南の四節度使を経たと記しているが、「舊唐書」卷一七七には肝腎な荆南節度使在職のことは全く脱落している有様である。そのため在職の年月を明かにし難いが、ほぼ大中末年頃ほんの短期間だけその位

置にあつたのではあるまいかと思われる。

*「行記」卷一、開成三年八月の條には揚州府衙へ圓仁が提出した答書に「師を尋ね疑いを決す」と見える。この疑とは寺家未決や修禪院未決などを指していることが翌年二月二十日の記載から知られる。圓仁は揚州を去るに臨みこれらの未決を圖載に托した。圖載は天台に到り、同五年八月維錫の決答をえ、それより先廣修からも同様決答をえた。現在傳存している「唐決」の中、圓澄問廣修決・圓載問維錫決というものこそ圓仁の寺家未決三十條に對する決答に外ならない。これに對し修禪院未決は答修禪院問十三條といわれているものに當る。けだし修禪院とは一般に義眞を指しているが、田島德音氏によると、安然の著「掛定草木成佛私記」に圓澄のことだとあるそうである。自分はいまだこの書を披見する機を持たないが、圓仁が入唐の砌り、寺家と修禪院との未決を携えていったことは動かし難く、後者について長部和雄教授が「日本天台錄」では維錫答となつていられるけれども、私は恐らく道遠か行滿か、恐らく道遠であろう（口傳法門における秘傳の起源と唐決との關係）と解しておられるのは根據がないようである。この他「唐決」中の德圓疑問宗願決・光定疑問宗願決も、「行記」にまったく觸れるところはないものの、「慈覺大師傳」の記載などから推して、圓仁が在京中に代問したこともありえないではないであらう。思いつくままこれを記して大方の示教を仰ぎたい。

昭和三十一年度文部省科學研究費補助による研究の一部である。記して謝意を表する。

resigned as Prime Minister, and Lü Hui-ch'ing, one of his faithful followers, was appointed to succeed him. In spite of strong protest on the part of the opposition clique Lü was successful to abolish the chih-k'o system in 1074, A.D. When Emperor Cheh-tsung acceded to the throne in 1086, the Yüan-yü clique defeated the Hsi-ning clique, and the chih-k'o system was restored in the following year. Seven years later, when Emperor Cheh-tsung began to favour the Chih-ning clique, he agreed to abolish the chih-k'o system again in response to the request of Chang Tun. As seen in the above, the vicissitudes of the chih-k'o system are closely related with those of the political cliques.

Chih-hsüan and Yenin

Katsutoshi Ono

The biography of Chih-hsüan is found in the Biographies of Eminent Sung Buddhist Priests in the Dynastic History of Sung. He was born in Ssu-ch'uan, and went to Ch'ang-an to stay at the Buddhist temple, Tzu-shêng-ssu, at Tso-chieh during the reigns of Emperors Wên-tsung and Wu-tsung. Incidentally, the Japanese priest, Yenin happened to study at Tzu-shêng-ssu. These two learned priests, one Japanese and the other Chinese, made good friends with each other. Yenin also made many friends with those Chinese adherents of Buddhism who associated themselves with Chih-hsüan, and among them we find such eminent persons as Yang Ching-chih and Yang Lu-shih whose biographies are found in the Sung Dynastic History. If we look at Yenin's "Nyū-tō shin-gu shōgyō mokuroku" and "Nyū-tō gu-hō junrei gyō-ki," we meet with a number of interesting facts which do not appear in Chinese sources, but so far the personal association between these two eminent Japanese and Chinese priests seems to have been largely overlooked. Priest Yenin not only exercised a great influence over Japanese Buddhism but also he appears to have been one of the most prominent personages in the history of cultural contact between Japan and China in the T'ang period.